

臨床実習前後のプレ実習およびポスト実習に対する意識変化の調査

新潟リハビリテーション病院 言語聴覚科 佐藤卓也
 同 矢内康洋
 同 山田理沙
 同 佐藤 厚
 新潟医療福祉大学 言語聴覚学科 吉岡 豊
 同 志村栄二
 同 糟谷政代

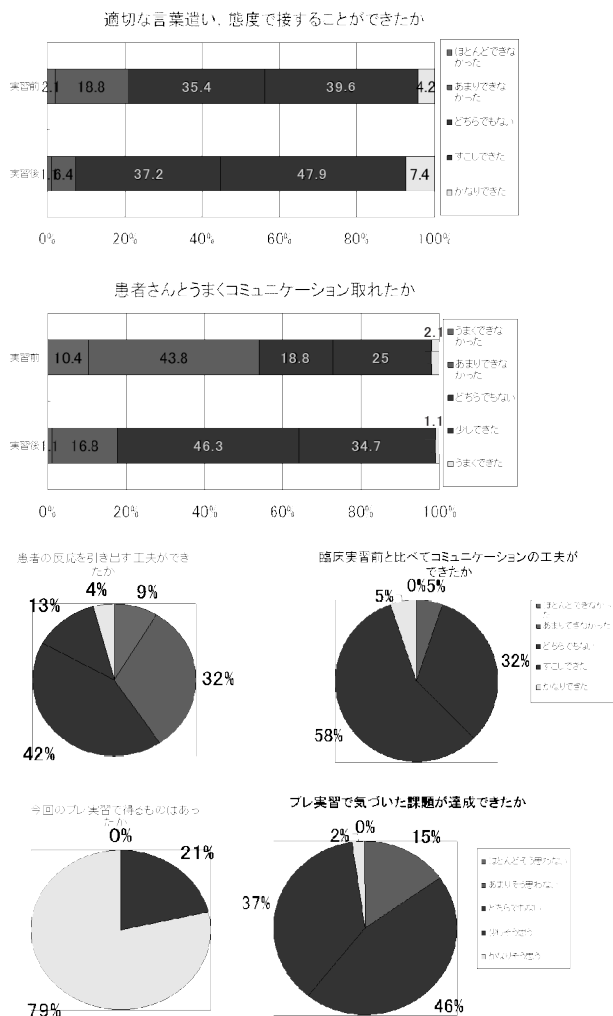
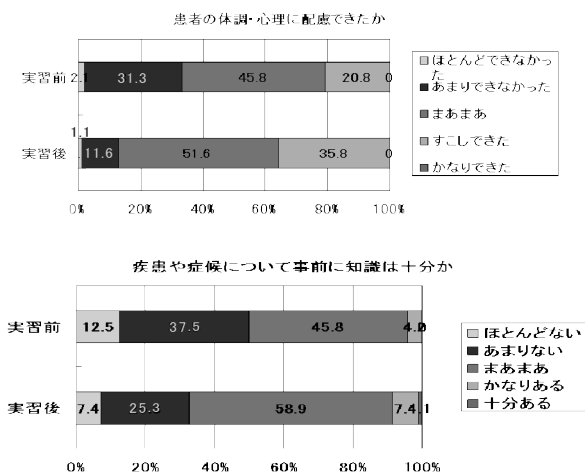
【背景】

一昨年度より3年次臨床実習Ⅱの前にプレ実習として、学生に当院で患者との臨床の場に参加する機会を設けている。一昨年度は検査評価を実施していたがグループ単位で一患者にあたり検査実施、分析の手法をとっていたため実際に携わる学生と見学のみの学生との間に温度差がみられた。そのため昨年度は全員に患者とのコミュニケーションの機会をつくるべく集団訓練に参加する場を設けた。プレ実習および臨床実習後のポスト実習参加時にアンケート調査を行い実習に対する意識調査を行ったので報告する。

【方法】

対象：言語聴覚学科3年生48名。実施時期：平成22年9月8日～平成23年3月28日。計41回。学生は2～4名ずつに分かれ、臨床実習Ⅱの前に1回、後に2回の計3回、当院で毎週行っている2階病棟あるいは3階病棟グループ訓練のいずれかに参加した。訓練は1回60分、6名～20名程度の患者で構成され、学生は任意の患者につきサポートをした。グループ訓練は集団ゲーム、対抗レクリエーション、共同制作、歌体操や合唱を行った。終了後、患者に対し配慮、気配りや自分なりの工夫をしてサポートできたかについての質問紙に記入してもらった。それらを臨床実習前後で比較検討した。

【結果】



自由記載の項目では、「当初、何を求めてプレ実習に望みましたか」に対し『コミュニケーションのとり方』『STがどのように患者とかかわっているか』との回答がほとんどを占めた。また「コミュニケーションのとり方に対しどう意識が変わったか」に対し『目線や声のかけ方を考える』『積極的に自分から話しかける』『普段とは違う話し方が必要』との回答が多くみられた。

【考察】

1回目のセッション時の調査では、患者に対する配慮、状態観察、コミュニケーションのとり方などに不安が感じられるものの、臨床実習前に実際に接する機会があることは学生の自覚を促す意味では意義があると思われる。臨床実習後のセッションでは、実習前と比較し患者に対する配慮、コミュニケーションの工夫などもできたと回答する割合が増加している。プレ実習は、自分の課題の気づきとその取り組みの場にもなっていると考えられる。

【結論】

プレ実習の試みは学生に自分の課題を自覚し、実習に出る前の心構えを促す意味のあるものと考えられる。